

## 李大釗資料拾遺，並びに覚書（続）

後藤延子

(E)

以下は順天時報7000号記念号（1923年8月30日）第六面に掲載された，李大釗の『報与史』と題する文章である。李大釗の著作の拾遺作業の中で今回発見したものであり，標題は以下の如くカットつきである。



史與報

授教學大京北  
釗大李

報与史有密切親近的關係，我們從『史』字的原義，可以看出報与史間有類似的性質，中文『史』字有掌司記事者之義，英語 History 与法語 Histoire 義語 Storia 同蛻自希臘語及拉丁語的 Historia 此字原是『問而知之』的意思，由是轉變而為紀問而得知的結果的東西，就是記錄的意思，德語史為 Geschichtete，荷蘭語史 Geschiedenis 有發生的事件的意思，由各国文字的本義觀之，『史』的意義，雖互有差異，而其性質頗有与今日的報接近的点，則攷諸各国文字，皆能溯尋其始義而得之

史的文字的原始，既已多少含有今日的報的性質，那麼作史的要義，与作報的要義，亦当有合

史的要義凡三，○曰，察其變，社会的進展不已，人事的變遷無常，治史者必須即其進展變易之象，而察其程迹，始能得人類社会之真象，○曰，蒐其實，欲求人類進變之迹，苟於個個現實發生的事件，未得真確之証據，則難免馳空武斷之弊，○曰，會其通，今日史学進步的程途，已達於不僅以考証精核片段的事實，即為畢史之能事了，必須認人事為互有連環，互有因果關係者，而施以考察，以期於事實与事實之間，發見相互的影響与感應，而後得觀人事之會通，此三義者，於史為要，於報亦何獨不然？

報的性質，与紀錄的歷史，尤其接近，由或種意味言之，亦可以說『報是現在的史，史是過去的報，』今日的報紙，於把每日發生的事件，報告出来，以外有時亦附載些文藝論壇，及別種有趣味的評論等，以娛讀者，又凡一個報，無論其為一党派或一團體的機關，或為單純營業的独立的組織，必各持有一定的主義与見解，社中的記者，即本此主義与見解以發揮其宣傳的作用，而就報紙的普通，而且重要的主旨，乃在盡力把日日發生的事實，迅捷的而且精確的報告出来，俾讀報紙的人們，得些娛樂教益与知識，今日報紙的需要，幾乎成了一種人生必需品的原故，就在他能將日日新發生的事件，用有系統有趣味的筆法，描写出来，以傳布於讀者，

使人事發展社会進化的現象，一一呈露於讀者的眼前，報紙上所紀的事，雖然是片片段々，一鱗一爪的東西，而究其惟質，實與紀錄的歷史原無二致，故新聞記者的職分，亦與歷史研究者極相近似，今日新聞記者所整理所紀述的材料，即爲他日歷史研究者所當蒐集的一種重要史料

今日新聞記者的事務，既負爲他日史家預備史料的責任，那麼記聞記者於載筆紀事的時候，必當本着上述史的三個要義，以相從事，其報始有價值，惟作報與作史有最有不同之點，就是作報大率多致力於力求其報告的迅捷，求迅之念切，則與蒐實之義不能兩全，而新聞記者之紀事，又每易爲目前發生的零碎事象所迷驚，因之於察變會通之義，常易紛失其因果聯貫之系統，這是新聞記者應該特加注意的事，爲免此弊，新聞記者要有歷史研究者的修養，要有歷史的知識，要具有與史學者一樣的冷靜的頭腦，透澈的觀察，用研究歷史的方法，鑑別取捨關於每日新發生事實的種種材料，這樣子纔可以作成一種好報紙，同時亦能爲未來的史家預備些好史料（完）

さて順天時報は、1901年12月12日から1930年3月27日の9285号まで、北京で約30年間発刊された漢字新聞である。初めは東亜同文会の中島真雄の個人経営として出発したが、1905年、公使館に譲渡され、「外務省の保護の下に」に入った。従って日本政府の御用新聞としての性格から自由ではなく、公正中立な報道を望むべくもないのは容易に理解できよう。周作人がその記事の偏見と歪曲に憤慨し、「悪辣」「暴論」と口をきわめて非難するようなケースが多かったのも事実である（『談虎集』所収の『日本浪人と順天時報』等々参照）。筆者自身も留日学生の対華二十一カ条要求に対する反対行動が、日本内地の新聞や中国の時報などには報道されていたながら、順天時報にはついに一字も見出せなかった経験があり、その日本に都合の悪いニュースは黙殺する報道姿勢に感じ入ったことがある。

ところでこうした性格の順天時報に、李大釗の文章がどうして掲載されたのか。しかもこの文章の内容は、まさしく順天時報の報道姿勢、新聞としての見識を鋭く衝き、その反省と是正を強く求めるものであり、順天時報の方針と真向うから対立するものであった。従って順天時報に最も似つかわしくないものと言ってよい。

さてこの当時の順天時報は、大谷探險隊の隊員であった渡辺哲信が社長であり、編輯長は橋川時雄であった。今村与志雄の『橋川時雄著訳年表』（汲古書院影印『文字同盟』第二巻）によると、橋川は1923年の6、7月頃から24年の9月頃まで編輯長をつとめていたという。それゆえ7000号記念の特集号の企画は、新編輯長橋川の初の大仕事として、その腕前の見せどころであったろう。

ところで李大釗と同じくこの7000号記念号に、呉虞の『荀子之天論与辟譏祥』（未完）、周作人の『親日派』、汪榮宝の『転注説』も載せられている。『呉虞日記』1923年8月7日によると、「北京順天時報社橋川時雄、因藤塚之介紹来函求稿、作順天時報紀念。稿以八月二十日以前交去」とあり、旧知の藤塚隣ちかしの紹介により記念号の原稿依頼の手紙を受け取ったことがわかる。呉虞は早速その翌日8月8日に、自己の詩集『秋水集』一部とともに、『荀子之辟譏祥与天論』を順天時報社に送っている。8月14日には、橋川より原稿を受け取ったとの来信があり、「莊誦一過、大有啓弟蒙者、誠為敝報添一段光彩、忭舞奚如、云云」との言葉が添えられていた。そして8月30日当日には、橋川より記念号が2部寄せられ、呉虞はそれを見て、「予文尚未完。周作人・汪榮宝之文、均旧作也」と記している。即ち呉虞の文章

は長すぎて全部掲載されなかったこと，及び周作人と汪榮宝の文章は旧作で，記念号のために新たに稿を起したものでないことを指摘したのである（呉虞の続きは第4回まで続いたところで，この年の9月1日の関東大震災の記事などで，中断した）。

さて以上の呉虞の原稿をめぐる橋川とのやりとりから推して，李大釗の場合もほぼ同様の経緯を辿ったと見てよかろう。そして7000号記念号は，第一面に小鳥の群れ集う森の中に左手に竖琴をもち右手に光の玉を掲げてすっと立った，月桂冠をかぶった女性の天使のイラストの横に順天時報の題字を配し，社論『管見と自箴』で自社の方針を唱い上げている。以下通常の二倍の十六面に及ぶ紙面には，黎元洪，段祺瑞，宣統帝溥儀，顔寵惠や孫文の写真や題字，王正廷，徐佛蘇，高凌霨ら中国各界の錚々たる人物の祝詞，李大釗，周作人，呉虞らの文章とともに陳煥章の『籌辦北京孔教大学之要旨』も載せられ，些かも偏らない，総花的とも言える豪華絢爛さを誇っている。まさしく新編輯長の意欲的な且つ練りに練った構想のたまものと評すべき巧みな紙面づくりであり，後に名著『中国文化界人物総鑑』に結晶する，豊かな人脈づくりの伎倆がすでに片鱗を示している。

だが，このように細心にバランスを整え，一点非の打ちどころのない用意周到な紙面構成であったとしても，李大釗の文章の掲載はやはり相当に危険な賭けであったと言える。橋川は後に，「私が李大釗に寄稿を求めて順天時報に載せたときなど，えらい物議を社の内外にかもしたいです。中江丑吉から同僚の佐々木忠に言づけして，領事館警察が見張りをしているから注意するがいいと忠告してきたこともありました」（『学問の思い出——橋川時雄先生を囲んで』1968年『東方学』35輯）と回想している。勿論，要注意人物としてマークはされたものの，橋川の身に直接累が及ぶことなく終わったものとみられる。だが，「新編輯長橋川先生，又将貴報大為改造，前程万里，正是無量也」（読報人『貴報七千号紀念感言』）の意欲的編輯方針に一抹の影を投げかけるものであったことに相違はなからう。

さて1924年9月頃編輯長をおいた橋川は，1927年3月順天時報社を退職し，『文字同盟』を発行するかたわら，対支文化事業に関係し，『続修四庫全書総目提要』の編纂事業などに全力を傾けている。その生涯については，女婿今村与志雄氏の上述の『橋川時雄著訳年表』とその参考文献，及び同氏の『「続修四庫全書提要」と影印本「文字同盟」第三卷「解題」補遺』（『汲古』23号，1993年7月）に詳しい。

ところで順天時報が外務省の保護下にある以上，日本政府の対中国政策のスポークスマンとしての制約がはめられており，それからの逸脱は不可能であったことは紛れもない事実であった。とはいえ，7000号記念号到北京における中国共産党の中心リーダー李大釗の文章が登場したことは，社長，編輯長，記者などスタッフの陣容如何によっては，それ独自の紙面づくりを示すこともあり，必ずしも御用記事のみと決めつけてすませないことがわかる。従って中国国内に次々に生起する事件，及びそれへの日本の対応の中で，順天時報もその制約の枠内でなにかの幅をもった報道が可能であったとも見られ，その報道の不自由さ，偏向性のみ眼を奪われ，否定的評価で塗り潰してしまうわけにもいくまい。丁度この時期の順天時報について，『龔德柏回憶録』は，「最も嫌われながら最も売れ行きのよい新聞は，日本人発行の順天時報である。この新聞は，当然のことだが一切の中国と政府の要人とにとって不利なニュースを敢えて載せており，政府はそれに手がつけられなかった」と述べている。それゆえ，1901年から30年までの激動の中での日刊紙としての歴史の厚みを思うと，や

はりその紙面に即してきめ細かく検討し、その果した客観的役割・歴史的意義を見極める作業が今後に残されることになろう。

さて最後に、李大釗の文中の「報是現在的史，史是過去の報」のフレーズについて気がついたことを述べておきたい。梁啓超『敬告我同業諸君』(1902年10月『新民叢報』17号)に、「西哲有言，報館者現代之史記也」とあり、あるいは出典を同一にしている可能性もある。王新命『新聞圈裡四十年』では、「昨天的新聞，就是今天的歷史」とある。またシーレーの『政治学序論』の冒頭の言葉、「政治は現在の歴史であり、歴史は過去の政治である」にヒントを得て、政治を新聞と置き換えたのかもかもしれない。この語は久松義典『近世社会主義評論』第二篇第四章にもある。ともあれ明確な典拠には、目下のところ巡り会えなかった。

ただ北洋法政専門学堂卒業後、『言治』月刊の編輯に従事するかたわら、北京に出て『法言報』の編輯に携わり、また日本留学から帰国後は、『晨鍾報』、『甲寅』日刊の編輯に関わっていたジャーナリストとしての閱歴の深い李大釗であってみれば、報道のあり方、新聞人の責務について、反省を迫られる機会が多かったことは容易に想像がつく。その中でこのフレーズに逢着し、心に深く刻みつけられたのかもかもしれない。あるいは自己の心中におのずから熟成し定着したものであったかもしれない。ともあれ刑死を予感して『獄中自述』の末尾に、「釗夙研史学，平生搜集東西書籍頗不少，如已没収，尚希保存，以利文化」とつけ加えた李大釗の歴史学への関心の深さを、このフレーズと切り離して考えることはできまい。

#### (F)

李大釗の1914年1月の日本留学の費用について、張次溪『李大釗先生伝』(1951年宣文書店)は、孫洪伊と湯化龍の援助を指摘し、呂健『李大釗和瞿秋白』(同上年商務印書館)は、孫洪伊から彼を紹介された湯化龍が、その「学識才力」に感服して資金を援助したと述べている。以来、呂健の説がほぼ定説と化して今日に至っている。

ところで湯化龍といえば、清末民国初の政界で重要な役割を果たした人物であり、共和・統一・民主の三党を合併して1913年5月29日成立した進歩党の指導者として、梁啓超と並び称される大物政治家である。彼は清末以来一貫して孫文らと政治的主張を異にし、民国初年の政局を、結局は袁世凱の思惑通りその独裁権力強化の方向に手を貸した有力な政客であり、1918年9月、カナダのヴィクトリアで現地の国民党員に狙撃されて生涯を閉じている。

さてこうした政治的立場に立つ湯化龍に見込まれたということは、日本留学以前の李大釗の政論の及ぶ範囲が、ほぼその圏内にあり、共通する部分が多かったことを物語っている。従って、中国における最初のマルクス主義の体系的紹介者、中国共産党の創立者、初期の指導者、軍閥張作霖に絞首刑に処せられ革命に殉じた烈士の輝やかなしい経歴が、決して当初から単純明快に完成していたわけではないことがわかる。それゆえ、袁世凱を選び、彼に民国の前途を託すという出発点に立ちながら、国内外に次々に展開する情勢の変化の中で、自己の思想の枠組みを問い直し作り変えつつ歩み続けてきた、苦渋に充ちた紆余曲折の道程を解きほぐすという課題が、我々研究者の前に突きつけられるのである。

さて今回、筆者はこの李大釗の日本留学をめぐる興味深い資料に出会うことができたので、この誌面を借りてその事実について報告し、且つ若干の考察を加えてみたいと思う。それはかいつままで言うと、湯化龍の手を通じて提供された留学資金は、別に湯個人の財布から出

たのではなく、進歩党の党財政から支出されたものであり、少くとも十数人の青年たちがその支給を受けて日本に留学しており、李大釗はその一人にすぎなかった、という事実である。

そもそも湯化龍自身が、北京進士館官費生として日本の法政大学清国留学生法政速成科第四班（1905年11月入学、07年5月卒業）で学んだ帰国留学生である。『法政大学史資料集』第十一集（1988年法政大学発行）によると、彼は卒業生263人中6名の優等生の一人という、好成績で卒業している。同級生には、清末の諮議局連合会以来、彼と最後まで政治的立場を同じくした山西の梁善濟、清末は同じ立場で協力したが民国になって彼と訣別した、丁世嶧と沈鈞儒、及び国民党の居正がいる。また四川の呉虞も同級生である。

帰国に際して日本留学中の成果を『大清違警律釈義』にまとめた湯化龍は、終生、知識欲が旺盛であったという。盧蔚乾『記湯化龍二三事』（『湖北文史資料』8輯）によると、読書と研究と講演を好み、多忙な政治生活のあいまを縫って、法政学校や陸軍大学などの教壇に立ち、学生に法律・政治知識を熱心に講じたという。また1916年衆議院議長に返り咲いた時、湖北旅京学生会を組織し、その機関誌『楚宝』の発刊詞を書き、学生に「真の知こそ真の愛を生む」として、社会の団結のためには正確な知識を身につけるよう呼びかけ、また服従の精神とともに「批評の精神」が立憲国民には不可欠であり、活潑な新しい社会は学生にかかっていると力説している。

また『湯化龍游美日記』（湖北文史資料』8輯）によると、船中で日本人を観察し、「日本経済の発展は、全く国民の堅苦忍耐にあり」（6月10日）とか、「日人精神活潑、公共事業に熱心」（6月16日）とかの感慨をもらし、偶々乗り合わせた永井柳太郎とともに講演を頼まれると、「日人知識を求むるに熱心、男女みな講演を聴くを喜ぶ。船中に在りと雖も、なおこれを楽しみて疲れず。且つ要求甚だ切。余、極めてために感動す」（6月17日）と記している。更に、入国審査は中国人が常に日本人より後廻しにされ、一二日余分に留置される状況（6月21日）など、アメリカの華僑への待遇の悪さを知り、「喪乱の国民、自由国に入らんと求むるもまた自由を得ず、これ吾が国人のまさに猛省すべきところなり」（6月20日）と述べると同時に、チャイナタウンが日本人街と比べて、「秩序の整齊、店戸の潔淨」において「天淵の別あり」（6月22日）、また「賭家」が多いこと（6月29日）を指摘している。

このようにことごとくに日本人との比較に敏感な湯化龍は、アメリカの役所の雑踏と自由な振舞いを目撃して、「さきに日本の官署の極めて整肅を見る。此間と廻かに相同じからず。殆どまた平民政治と官僚政治との分か。但だ未だ深くその内容を知らざれば、未だ敢えて遽かに二者の優劣を断ぜざるのみ」（6月21日）と、極めて意味深長な言い廻しで自己の感慨をもらしている。もともと湯化龍のアメリカ旅行は、1917年11月、進歩党がもはや中国の政界で存立の基盤を失い完全に挫折したことから、民主・共和の本国の政治制度を視察して、再度陣容を整えて政界に復帰するための参考の資を得るためであった。しかし今回の手痛い破綻に懲り政治から手を引き学問の世界に没頭していった梁啓超とはちがい、政治への未練たっぷりの湯化龍が、果してこの旅行から、見放され見限られた自己の政治的主張への根本的反省を得たか否かは、上記の感慨に見るかぎり、極めて疑わしいとせざるをえない。

さて以上の如き経歴と思想の持主である湯化龍であってみれば、中国社会の近代化と立憲国家としての前進のため、確実な近代的政治学法律学の知識を身につけた人材の養成が緊急の課題だとの深い認識をもっていたことに間違いない。そして彼は自己の周辺にいる前途有

為の青年たちに期待をかけ、彼らが留学して帰国の暁には、彼を助けて共に民国の政治の運営の重責を担ってくれることを切に希望していたと見てよかろう。そしてその場合、留学先は民主・共和の本家の欧米ではなく、彼にとり見習うべき模範として中国の一步前を歩いている日本が選ばれ推薦されたことも、容易に理解できる。彼は1914年秋、妻をつけて娘の佩琳と息子の佩松を日本に留学させてまでいるのである（沈雲龍『湯化龍其人其事』伝記文学叢刊『民国史事与人物論叢』所収）。

ところで湯化龍による1913年末から14年初頭の留学生派遣について、李仲公『護国之役時的湯化龍及其集団（『湖北文史資料』8輯）は、合計9名であったと言う。それによると、劉崇佑と林長民の紹介による劉道鏗・陳博生、孫洪伊の紹介と文章により湯化龍から知遇を得た李大釗・李其荃（李仲公のこと）、蒲殿俊の紹介による張梓芳（必果）、李大釗の紹介による霍例白・張潤之・李凝修、湯自身が推薦した南庶熙であり、これらは大部分早稲田大学で政治経済学を学んだとのことである。

韓玉辰『湯化龍の一生』（同上）は、李大釗・陳定遠・盧復（蔚乾）・彭国偉（伯勳）・羅貢華等々と言う。盧蔚乾『記湯化龍二三事』（同上）は、李大釗と蔡成渠（天民）の名をあげる。華覚明『進歩党和研究系』（『文史資料選輯』13輯）は、党の預金から一部分をさき、李大釗・南開鍾・蔡天民等を留学させたと述べている。

さて李大釗は、「吾が友夏子競氏（夏勤のこと一後藤注）……去歲初秋航海して江戸に来る。余もまた沢民・凝修と相継いで至る。残冬風雪、海外相逢う」（『「自然律与衡平律」識』）と述べている。沢民は張潤之の字であり（『中国経済財政学会簡章』に附した民国五年の責任会員姓名籍貫による。『民彝』第1号）、凝修は李凝修のことである。よって前掲の李仲公の述べる如く、この二人が李大釗とともに日本に留学に送られたことは確実としてよい。

また『民彝』第1号所載の留日学生総会の職員一覧表の中に、評議員、及び文事委員会の一員として、四川の張榜芳の名があり、従って李仲公の述べるが如く、張も留学生として派遣されたことは確実であろう。そして留日学生総会の文牘科主任で、李大釗らとともに東京で神州学会を組織した李翰章（墨卿）の『墨園隨筆』（1932年）に、湖北の蔡天民が会員であったことが記されている。これも前掲の盧蔚乾と華覚明の両人が名を挙げているところから、湯化龍から留学に派遣されたと見てまず間違いはあるまい。

陳博生（本名陳溥賢、ペンネーム淵泉）は、『早稲田学報』258号によると、大正5年7月専門部政治経済科卒業生名簿に登載されている。専門部も修業年限は大学部と同じく3年であり、従って大学部に入学した李大釗と全く同時に入学したことになる。ただ陳の場合、李大釗が北洋法政専門学堂卒業の資格が認められ、無試験で大学部政治経済学科一年に編入された（早稲田大学保存の李大釗の学籍簿による）のとはちがい、「中学程度諸校卒業生」の資格しかなかったのかもしれない。ともあれ留日学生総会、中国経済財政学会にも李大釗と共に名を列ねている。以後も李大釗と何かと関わりがあった人物であることは、石川禎浩『李大釗のマルクス主義受容』（1991年5月『思想』803号）に詳しい。陳溥賢は湯化龍がアメリカ旅行出発の前に日本に立ち寄った際にも通訳として随行しており（前掲『法政大学史料集』によると、法政速成科規則第一条に、中国語の通訳を以て教授することが定められており、湯化龍の日本語会話能力はさして高くなかったと見られる）、湯の存命中、常に政治的立場を同じくして彼につき従っている。



霍例白（霍侶白とも称する。本名霍堅）は、彼に宛てた李大釗の詩と手紙が残っている。それは、1916年4月に張潤之と共に上海に到着した際のもので、詩は『李大釗文集』下に、手紙は『李大釗遺文補編』（1989年黒龍江人民出版社）に収録されている。手紙は、日本で卒業試験を受けている霍例白に、帰国後の袁世凱の帝制に対する反対運動の状況を報告したものである。従って彼も確かに日本に留学しており、李大釗は卒業できなかったが、彼は陳溥賢と同じく卒業までこぎつけたであろうということがわかる。霍例白は1918年、湯化龍のアメリカ視察旅行に随行し（『湯化龍游美日記』6月5日）、9月1日、湯化龍の「証婚」の下に挙式している。そしてその祝宴の後、中華街を歩いているところを襲われて湯化龍は死亡した（『湖北文史資料』8輯所収劉道鏗『湯化龍的政治活動及其思想』）。

さて以上の数人のケースから見て、先の李仲公の証言は相当に信頼するに足るとしてよい。従って、進歩党の若手の理論家・活動家となるべき将来を嘱望して、湯化龍がその預かっている党財政の中から、少なくとも十数人の有能な青年たちを日本留学に送り出し、李大釗もその一人に選ばれたということは、まず誤りないと結論してよからう。そしてそれあらぬか、湯化龍社長の下に1916年8月15日創刊された『晨鐘報』には、李大釗が総編輯に任ぜられるとともに（9月5日を以て辞任）、陳溥賢、李仲公、霍例白などが、その編輯陣を構成することになっている。前掲の李仲公が言うように、留学帰りの人々を中核に、「湯化龍集團の『少壯派』」が形成され、湯化龍の所期の目的が見事に実を結んだわけである。

ところで前掲の李仲公によると、「每人毎年の補助費は300元」とのことである。当時北京で月に10元あればかなり余裕のある学生生活を送ることが可能であったという。1918年、毛沢東が北京大学図書館で助理員として働き、8元の月給を貰っていたのは、青年が一人で生活するかぎり、さして不自由な額ではなかったとの当人の証言もある。ところで1914年の『国幣条例』で壹円銀貨は庫平の7錢2分、即ち900位 23.977795gであり、日本の50銭銀貨は800位 10.125gである。従って中国の方が少し価値が高いが、大まかにはほぼ同等と見なしてよい。大正3、4年当時の日本の物価はまだ安定しており、米一升が20銭から30銭で、本は専門書で2円から3円台、一般書で1円前後であった（以上は、岩武照彦『近代中国通貨統一史』、『造幣局百年史』、『大正ニュース事典』、日本図書センター『日本書籍分類総目録』などによる）。『龔德柏回憶録』によると、東京の安い下宿屋で三食付き三畳間の部屋で1ヵ月10円であり、高いところでも14、5円で十分だったという。

学費については、教育機関や入学年度の相異により、金額に相当のバラつきがあり、また学校側の公表された資料、マスコミの情報、個人の家計簿や日記などに、学費の正確な記載が意外に少なく、確実な金額は容易にはつかみにくい。政法学校は月謝6円を徴し、浩然盧は「一ヶ月食費其他一切ノ費用トシテ金十円ヲ徴シ」ていたという（『日本外交文書』大正三年度「中国革命党関係者ノ動静ニ関スル件」514「中国留学生教育ノ私立学校ニ関シ取調ノ結果報告ノ件」）。また『龔德柏回憶録』によると、正則補習学校や数学館で日本語や数学などの一教科の補習の「学費は極めて低く、毎月たった一元二角であった」という。さて、『早稲田大学七十年誌』（1952年）によると、大正14年（1925）4月の入学生から、専門部は85円から100円に、高等師範部は95円から111円に、文学部は120円から140円（いずれも年額）に値上げされている。大正3年の物価指数を100とすると、大正7年のそれは230であり、この間、戦争景気による凄まじい物価の騰貴があったことは、1918年、米騒動の嵐が全国を

吹き荒れたことから十分に理解できよう。

早稲田大学の場合、1919年に新大学令による機構改革を実施し、90万円の供託金を国庫に納めねばならなかった。従って大正3年度入学生の李大釗の場合に比べて、大正14年度入学生の場合は、その間、一度、あるいは二度の学費改訂があったと見てよい。従ってこれはあくまで推測にすぎないが、大学部は90円内外、専門部は50円内外と見ておけばよいのではないかと考える。

だとすると、1人年間300元の支給があれば、学生生活を送る上では特に支障はなく、書籍の購入などにも、かなり廻せたと見てよい。そして李大釗が留学期間中、相当数の日本語の雑誌・書籍を購入し持ち帰っていたことについては、拙稿『李大釗と日本文化——河上肇、大正期の雑誌』（1991年信州大学人文学部特定研究報告書）で触れておいた。

当時の中国人留学生には、勿論留学生自身に肉体労働の経験もなければその発想もないことがあるが、今でいうアルバイトの口はなかった。ただ文を書いたり本を訳して、新聞社か雑誌社に売る以外に収入の手だてはなかった。従って留学生は、官費留学生か、余程の金持ちの子弟か、或いは特殊なスポンサーのつきの者に限られていたと言ってよい。勿論、官費を友人または兄弟と共同で使い、生活を切りつめてしのぐ留学生も数多くいたという。（民立報1913年8月16日付「游学経費之規定」によると、教育部は紆余曲折の末、日本への官費留学生に年間400元の支給を決めている。因みに、アメリカは960ドル、イギリスは192ポンド、フランスは4800フラン、ドイツは3800マルクである）

さて李大釗たち、湯化龍から送り出された十数人の青年が、さして不自由なく日本での留学生生活を営むことができたとすれば、次の問題は、その進歩党の党財政の来源はどこにあったかということである。近代的な意味の政党であれば、黨員個々人の党費や党の出版活動その他の事業収入により、党財政は支えられるであろう。しかし民国初年の中国の場合は、必ずしもそうではない。とりわけ国民党に対立し、袁世凱の意図に陰に陽に加担する政党の場合、袁世凱から潤沢な資金が施されていたことは、張玉法『民国初年の政党』（1985年中央研究院近代史研究所専刊49）などの指摘をまつまでもなく、むしろ常識に属する事柄であった。そして1913年4月に袁世凱が国会の反対を押しきり強引に締結した善後大借款（当時のレートではほぼ2億5000万元に相当）の一部が、その有力な資金源をなし、国民党の分裂、黨員の籠絡、アンチ国民党政党の育成、そして第二革命の鎮圧などに活用された。袁世凱は金をふんだんにバラまき、自己の支配権力の強化を着々と進めたのであり、その札束で横面をはるやり方は、唐在礼『辛亥以後の袁世凱』（『文史資料選輯』53輯）に詳細に描かれている。

そして国民党と対抗する一方の雄である進歩党の結成に当り、前掲の劉道鏗は、「袁世凱は前後二回にわたり50万元の費用を支給した」と語っている。勿論、その他に湯化龍・梁啓超や他の主立った利用価値あるリーダーたちに、再三にわたり個人的な援助をしていたことも、前掲の唐在礼の証言するところである。梁啓超は、1915年、『異哉所謂国体問題者』を書き、袁世凱の帝制運動に筆誅を加えようとしたとき、袁がそれを聞きつけ20万元を人に持たせて寄越したことを、『国体戦争躬歴談』（1916年『盾鼻集』）で暴露している。1914年9月3日付の『時報』によれば、在仏の汪兆銘と蔡元培とに対し、「二人は国民党に隸すると雖も、なお煽乱の実働なし。且つ学問を富有し、現にフランスに困しむ。特に飭して四千フランを匯して接済す」とある。この報道の真偽のほど、そしてもし真であったとしても二人が



受け取ったか否かは、資料がないので何とも言えない。しかしそのニュースの後段に、「駐日本の陸公使に電して、孫・黄に反対する留日学生を查明し、<sup>すぐれ</sup>尤たるを択び、給するに学費を以てせしむ」とあるのを見ると、人の弱みにつけこんで隙を見てはヒモをつけようと図る、袁世凱の巧妙で執拗なやり口がよくわかる。

従って以上から、李大釗たち十数人の日本留学用に支出された進歩党の党費とは、主として袁世凱から提供されたものの一部であると結論してよからう。勿論、当時において当事者たちは全く知りもしなかったことかもしれない。しかし誤解を招くのを承知の上で極言すれば、李大釗たちは袁世凱の金で留学したことになる。だが借款の支払いは中国人民にかぶせられた以上、中国人民の金で留学したとも言えるわけである。

ともあれ湯化龍の手を通じて進歩党の党資金から留学費用をもらった青年たちは、進歩党の若手の有能な働き手たるべく期待されて派遣された以上、情勢次第では中途帰国を求められるのも、やむを得ないことであった。李大釗の1916年1月の帰国は、女婿賈芝の『李大釗同志的故事』(1957年『新観察』8期)の語るように、湯化龍の帰国要請電報に従ったと見ることができる。そして二週間後に再び日本に戻り、すでに2月2日付で「長期欠席除名」(李大釗の学籍簿事由欄による)になっていることを知ったものと思われる。当時の早稲田大学では出席条件が特に厳しく、『早稲田学報』236号第十一 学生課によれば、「毎日出席点呼を行ひ」、長期欠席には父兄・保証人に注意し、本人に訓戒するなどであったという。従って卒業試験を受ける資格を失った李大釗は、卒業をあきらめて反袁闘争に馳せ参ずるため、4月、最終的に日本に別れを告げ、友人張潤之とともに上海に向ったものと思われる。

そして韓玉辰『湯化龍的一生』(『湖北文史資料』8輯)は、反袁闘争のために上海に行った湯化龍が、袁世凱の放ったスパイの暗殺を避けるため外出をひかえ、「李大釗が代理として各方面との連絡に当たった」と言う。『白堅武日記』1916年2月14日には、李大釗からの留学を勧める手紙に接したとある。その後、白堅武は妻の病床にかけつけて日記は中断するが、4月29日、孫洪伊から李大釗がまだ上海に来ていないことを聞き、30日には一緒に日本から帰国した張潤之が湯化龍のところと同居していることを知って会いに行っている。5月1日、李大釗が張継とともに上海に来ることを聞いて待ち焦がれるが、張継は5日に来たものの、やっと李大釗に会えたのは、南京代表会議の後の5月19日であった、と記されている。そして先述の李大釗の霍例白への手紙は、その内容からして、丁度この頃に書いたものと見られ、彼の連絡役としての東奔西走ぶりを偲ばせる。

李大釗の帰国後の思想と行動のこれ以上の追跡は後日に譲るとして、本筋に立ち返ろう。李大釗は16年9月4日、『晨鍾報』の総編輯を半月余りで突然辞任するに当り、『別泪』という小説めいた文章を発表し、政見の相違によって訣別せざるを得ない苦衷を吐露した。そして張勳による17年7月の廢帝溥儀の復辟クーデターの後、完全に湯化龍・梁啓超らの政治的主張に見切りをつけ、『辟偽調和』、『暴力与政治』を発表し、彼らを厳しく断罪した。李大釗によれば、彼らの政治的立場は、結局、調和の美名の下に、民国の政治舞台に特殊勢力を引き入れてその跳梁を容認し、生まれたばかりの民主・共和の民国を流産させ、その順調な發育を妨げてきた元凶に他ならないと決めつけられる。

しかしこの糾弾に際し、梁啓超は公然と名指しで非難されても、湯化龍の名は本文中に出てこない。『辟偽調和』の中で、「某もまた内務に長たり」として湯化龍のことが仄めかされ、

また本文中に引用した言葉の発言者として、注の中で湯化龍の名が示される。そして、「愚<sup>わたくし</sup>はさきに緩進派の一部の人士と過<sup>ひき</sup>従すること頗る稔<sup>あ</sup>し。……愚の某報を去るの時に方<sup>あた</sup>り、別れに臨んで言を贈るも、なお辞を寓意に托して以て諷勸をなす」と言う。「某報」とはまさしく『晨鍾報』のことであり、彼と親交のあった「緩進派の一部の人士」とは、湯化龍を中心とするその周辺の人々であり、多分に嘗ての留学生仲間を含むことは、見る人が見ればたやすくわかることである。だが敢えて公然とは湯化龍の名を挙げていない。このことは何を意味するか。

孫文や梁啓超の文中での「夫己氏」には袁世凱に対する軽蔑の意がこめられ、『参戦年余、未だ一兵も出さざる將軍』（『Bolshevism 的勝利』）に、段祺瑞に対する皮肉の意がこめられ、「都下の車を引き漿を売<sup>る</sup>の徒」（『林琴南致蔡先生書』1919年3月）に、蔡元培の父に対する嘲弄・揶揄の意がこめられている（丸山昇『五四文学革命の一面——「引車売漿」余話』UP1976年1月号）などは、言語空間を共有する当時の中国の読者には、一読して直ちに十分に意が通じたにちがいない。そしてこうした表現された言葉の奥にある言外の真意を読み取る技術を磨き、表現のしかた（筆法、筆するか削するか<sup>の</sup>選択）によって、発信者の褒貶の意を寓するというのが、中国の長い歴史の中に脈々と流れる、まさしく高度に洗練された<sup>の</sup>伝統文化そのものであった。従って我々は、春秋公羊伝的世界に立ち戻り、中国語の意味論的空間・語用論的環境に沈潜して、そこにこめられた「微言」・「微意」・「大義」を読み取るべくひたすら修行することが要請される。

さて李大釗が「緩進派」を厳しく批判し、明白に湯化龍をあてこすりつつも敢えて名指しを避けたのは、いかなる意図によるものか。筆者としては、そこに或る配慮、憚りの気持ちが流れているように思われる。たとい進歩党の党財政からであれ、自分を見込んで日本留学に送り出してくれた湯化龍の厚意に対する、個人的恩義、感謝の念が、消しがたい記憶として脳中に去来し、そのゆえに公然と名指しで攻撃するという挙に出るに忍びなかったのではないかと読み取ろうとするのである。

とはいえ梁啓超が、「革命党の首領と自ら命<sup>なづ</sup>くる者」（『粵乱感言』1911年5月）、「南方の革命の偉人」（『外交蹶内政蹶』1921年12月）などと、公刊した文章の中では孫文の名指しを憚りながら、1925年10月、孫文の死後に公刊した文章の中で初めて孫文の名を挙げて言及した（『如何纔能完成「国慶」的意義』晨报副鐫）のは、一体いかなる意によるのか、にわかには付度しがたいところである。ともあれ尊者や賢者のために諱んだり親しき者のために諱んだり、「指桑罵槐」や「影射」に満ち溢れている中国語の語用論・意味論的空間の底無し<sup>の</sup>の深さの中を、手探り足探りで進む以外にはない。 (完)